

6 古典を読解する

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈小計16点〉

延暦寺にて、下法師山へ行く時、児にいふ、昼の飯をば棚に置きたり。九つ鳴りてあらば、まるれと教へぬ。かの下僧、案の外、常より早く、昼以前にしまひて帰りみれば、児の飯なし。これは不審やと問ふ。疾くはや食ふたと返事せらるる。いまだ九つは鳴らず。いかでかと申せば、いや、今朝五つ、さきに四つ打ちたれば、九つなつた程に、それでくふたはと。

注 * 九つ・五つ・四つ＝時刻を知らせるために鳴らす鐘の回数。当時は、正午に九回、午前八時に五回、午前十時に四回鐘を鳴らした。

(安楽庵策伝「醒睡笑」より)

- (一) 線①「下法師山へ行く時、児にいふ」とありますが、このとき法師が児に言った言葉を文中から探し、その初めと終わりの三字を抜き出して書きなさい。
- (二) 線②「教へぬ」、④「食ふた」を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。
- (三) 線③「これは不審や」とありますが、どのようなことが不審だったのですか。現代語で二十五字以内で書きなさい。
- (四) 線⑤「いかでか」の現代語訳として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
 - ア どうしてか
 - イ どうすればよいか
 - ウ どうなりそうか
 - エ どうにもならないか
- (五) この話の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
 - ア 法師の言葉を聞き違えて早合点した子どもの失敗を描いている。
 - イ 法師の言葉にうまく対応した子どもの機転を描いている。
 - ウ 法師の言葉どおりに行動した子どもの実直さを描いている。
 - エ 法師の言葉に驚いて必死に弁解した子どもの戸惑いを描いている。

(一)				
(二)	②			
(三)			④	
(四)				
		(五)		

〔各2点 他各3点〕

二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈小計18点〉

今は昔、親に孝する者ありけり。朝夕に木をこりて親を養ふ。孝養の心、空に知られぬ。舵もなき舟に乗りて、向かひの島に行くに、朝には南の風吹きて、北の島に吹きつけつ。夕にはまた、舟に木をこりて入れてみれば、吹きて家に吹きつけつ。かくのごとくするほどに、としごろになりて、おほやけに聞こしめして、大臣になして召し使はる。

(「宇治拾遺物語」より)

注 * 1 こりて＝切つて。 * 2 空＝天の支配者。
* 3 とし ころ になりて＝長い年月がたつて。

- (一) 線①「孝する者ありけり」の「孝する者」と「ありけり」の間に補うことのできる助詞を現代語で書きなさい。
- (二) 線②「空に知られぬ」とありますが、どういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
 - ア 天の支配者を知ってもらいたかったということ。
 - イ 天の支配者は絶対知っていたはずだということ。
 - ウ 天の支配者に通じなかったということ。
 - エ 天の支配者に通じたということ。
- (三) 線③「行く」の動作主を文中から六字で抜き出して書きなさい。
- (四) 線④「かくのごとくするほどに」とありますが、どんなことをして

いたのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 北の島に行つて木を切つて、それで親を養っていた。

イ 北の島で暮らす親のめんどうを見ていた。

ウ 南の島にある木を切つて、それで親を養っていた。

エ 南の島で暮らす親の世話をするために北の島から通っていた。

- (五) に入る最も適切な言葉を三字で書きなさい。
- (六) この文章で述べられていることとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
 - ア 親を大切にしていた人物が、強く吹く風のために舟を流されて困り果てていた大臣を助けた。
 - イ 木を切つて親を養っていた人物が、その行いを朝廷に認められて大臣としてとりたてられた。
 - ウ 島で木を切っていた人物が、大臣の命令に従つて木を切る技術を磨き、世間で評判となった。
 - エ 北の島で育つた人物が、困難な航海の末に都に上り、熱心に勉強をして大臣の家来となった。

(一)				
(二)			(二)	
(三)				
(四)				(四)
(五)		(六)		

各3点

三次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈小計15点〉

ねたきもの 人のもとにこれよりやるも、人の返事も、書いてやりつる後、文字一つ二つ思ひなほしたる。とみの物縫ふに、かしこう縫ひつ思ふに、針をひきぬきつれば、はやく尻を結ばざりけり。また、かへさまに縫ひたるも、ねたし。

(「枕草子」より)

注 * 1 ねたき＝いまましい。 * 2 これよりやる＝こちらから送る。
* 3 とみの＝急ぎの。 * 4 かしこう＝うまく。
* 5 はやく＝何とまあ。 * 6 かへさまに＝裏返しに。

- (一) 線①「これよりやるも」とありますが、何を送るのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
 - ア 衣服
 - イ 道具
 - ウ 手紙
 - エ 日記
- (二) 線②「文字一つ二つ思ひなほしたる」とありますが、このときの筆者の心情として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
 - ア じょうずな文字を書けたことに満足している。
 - イ 書いた文字を少し直せばよかったと後悔している。
 - ウ 書いたことを思い出せずにあせっている。
 - エ 本心のままに書けたことを喜んでいる。
- (三) 線③「尻を結ばざりけり」とありますが、何の尻を結ばなかったのですか。漢字一字で書きなさい。
- (四) この文章で述べられている筆者の心情として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
 - ア 自分がついうっかりして失敗したことを、腹立たしく思っている。
 - イ 自分の贈り物にうまく心を込められず、腹立たしく思っている。
 - ウ 自分ではよいと思つたことを他人から非難され、腹立たしく思っている。
 - エ 自分の期待していた返事が来ず、腹立たしく思っている。
- (五) この作品「枕草子」の作者名を漢字で書きなさい。

(一)			
(二)			(二)
(三)			(三)
(四)		(五)	

各3点

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。 (小計18点)

二十二日。昨夜の泊より、異泊を追ひて行く。はるかに山見ゆ。年九つばかりなる男の童、年よりは幼くぞある。この童、船を漕ぐまにまに、山も行く^②と見ゆるを見て、あやしきこと、歌をぞよめる。その歌、漕ぎて行く船にて見ればあしひきの山さへ行くを松は知らずやとぞいへる。幼き童の言にては、似つかはし。

(紀貫之「土佐日記」より)

- 注 *1 泊＝港。
 *2 追ひて＝目指して。
 *3 童＝子ども。
 *4 漕ぐまにまに＝漕ぐにつれて。
 *5 あやしきこと＝不思議なことに。
 *6 似つかはし＝ふさわしい。

(一) 線①「幼くぞある」の部分に見られる「ぞくある」のような関係を何といいますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 対句法 イ 係り結び ウ 体言止め エ 倒置法

(二) 線②「山も行くと見ゆる」とありますが、どういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 山がなくなつたように見えるということ
 イ 山がたくさんあるように見えるということ
 ウ 山が動かないように見えるということ
 エ 山も動いていくように見えるということ

(三) 線③「その歌」の中から枕詞を抜き出して書きなさい。

(四) 線④「松は知らずや」の現代語訳として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 松は知っているはずがない。
 イ 松は知っているのだ。
 ウ 松は知らないのだろうか。
 エ 松は知ろうとしている。

(五) 線⑤「幼き童の言にては、似つかはし」とありますが、筆者のどのような様子がわかりますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 幼い童の和歌に負けまいとして意気込んでいる。
 イ 幼い童の和歌に失望を感じている。
 ウ 幼い童の和歌をほほえましく感じている。
 エ 幼い童の和歌の素晴らしさに舌を巻いている。

(六) 「幼き童」が和歌を詠んだときにいた場所として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 異泊 イ 海辺 ウ 山中 エ 船上

(四)	(一)	各3点
(五)	(二)	
(六)	(三)	
(一)	(四)	

五 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。 (小計16点)

ある者、道風が書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人、御相伝、浮けることには侍らじなれども、四条大納言撰ばれたる物を、道風書かむこと、時代や合はず侍らむ。おぼつかなくぞと言ひければ、さ候へばこそ世に有りがたき物には侍りけれと、いよいよ秘蔵しけり。

(徒然草「より」)

- 注 *1 道風＝書の達人の小野道風のこと。九六六年死去。
 *2 御相伝、浮けることには侍らじなれども＝先祖からの言い伝えは、根柢のないことではございませんでしようが。
 *3 四条大納言＝和漢朗詠集を編集した藤原公任。九六六年生まれ。

(一) 線①「ある人」が話した部分を文中から探し、その初めと終わりの三字を抜き出して書きなさい。

(四)	(三)	(一)	(四)2点 他各3点
A		(二)	
B		(五)	

注 *1 道風＝書の達人の小野道風のこと。九六六年死去。
 *2 御相伝、浮けることには侍らじなれども＝先祖からの言い伝えは、根柢のないことではございませんでしようが。
 *3 四条大納言＝和漢朗詠集を編集した藤原公任。九六六年生まれ。

(五) 松尾芭蕉は、東北・北陸地方の名所旧跡をめぐる旅をしましたが、そのときの旅に基づいて書かれた紀行文を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 源氏物語 イ おくのほそ道
 ウ 方丈記 エ 東海道中膝栗毛

(二) 線②「侍らむ」を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

(三) 線③「世に有りがたき物」について、次の問いに答えなさい。

I 「世に有りがたき物」とは、何を指していますか。文中から十一字で抜き出して書きなさい。

II 「世に有りがたき」理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 和歌の名人が編集したものであるから。
 イ 書けるはずのない人が書いたものだから。
 ウ 先祖代々受け継いできたものだから。
 エ 書の達人が書いたものだから。

(四) 線④「秘蔵しけり」とありますが、だれが秘蔵したのですか。文中から抜き出して書きなさい。

(五) 「徒然草」の作者を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 吉田兼好 イ 紫式部 ウ 鴨長明 エ 井原西鶴

(四)	(三)	(一)	(二)・(四)各2点 他各3点
	II	I	
		(二)	
(五)			

六 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。 (小計17点)

卯月の中ごろ、須磨の浦一見す。うしろの山は青ばにうるはしく、月はいまだおぼろにて、はるの名残もあはれながら、ただ此浦のまことは秋むねとするにや、心にもものたらぬけしきあれば、

夏はあれど留守のやう也須磨の月

(松尾芭蕉「夏はあれど」の詞書「より」)

- 注 *1 須磨の浦＝現在の神戸市須磨区内の海辺。月の名所として有名。
 *2 まこと＝真の情趣。本質。
 *3 むね＝主となるもの。中心。
 *4 ばせを＝松尾芭蕉のこと。

(一) 線①「卯月」とは何月の別称ですか。漢字で書きなさい。

(二) 線②「青ばにうるはしく」の現代語訳として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 青葉が茂って美しく
 イ 木の葉が風にそよぎ
 ウ 青葉のころが想像され
 エ 木の葉がぬれて青々とし

(三) 線③「月はいまだおぼろにて」とありますが、このような月に対する筆者の印象を表している言葉を俳句中から六字で抜き出して書きなさい。

(四) 線④「心にもものたらぬけしき」とありますが、筆者は、もの足りなく感じた理由をどう考えましたか。次の文の□A・Bに入る言葉を文中から抜き出して書きなさい。

いま眺めている□Aの風景が、真の情趣のある□Bのころの風景ではないから。

(五) 松尾芭蕉は、東北・北陸地方の名所旧跡をめぐる旅をしましたが、そのときの旅に基づいて書かれた紀行文を次から選び、記号で答えなさい。